

入学前指導・教育の構想

—入学前段階の情意的な特性把握の試み—

田中 均（島根大学入試センター）

入学前指導・教育を、初年次教育をはじめとする大学教育に接続するものとして位置づけて学習内容は方法を構築する必要がある。推薦入試合格者の情意的な側面に着目して、高校との連携・協力関係をつくりながら転換を図る入学前指導・教育の在り方や方法について、島根大学の取組みを紹介し今後の展開について考察する。

はじめに—大学準備教育の必要性—

平成22年9月30日に文部科学省委託事業として「高等学校段階の学力を客観的に把握・活用できる新たな仕組みに関する調査研究」（いわゆる「高大接続テスト（仮称）」）が報告され、平成23年12月8日には東京大学の「入学時期の在り方に関する懇談会」が「将来の入学時期の在り方について—よりグローバルに、よりタフに—」（中間まとめ）をまとめ、1月20日に発表した。

高校・大学間の教育課題としての高大接続という問題は、狭義の「学力」問題としてとらえるのみならず、学習する内容や意識や価値観、学問研究に向かう姿勢といった情意的な側面での接続を見通すとともに、どの時期にいかなる「転換」を図るかという高校・大学の教育システムに関わる問題としてとらえる段階に入ってきている（荒井 2004:pp10）。

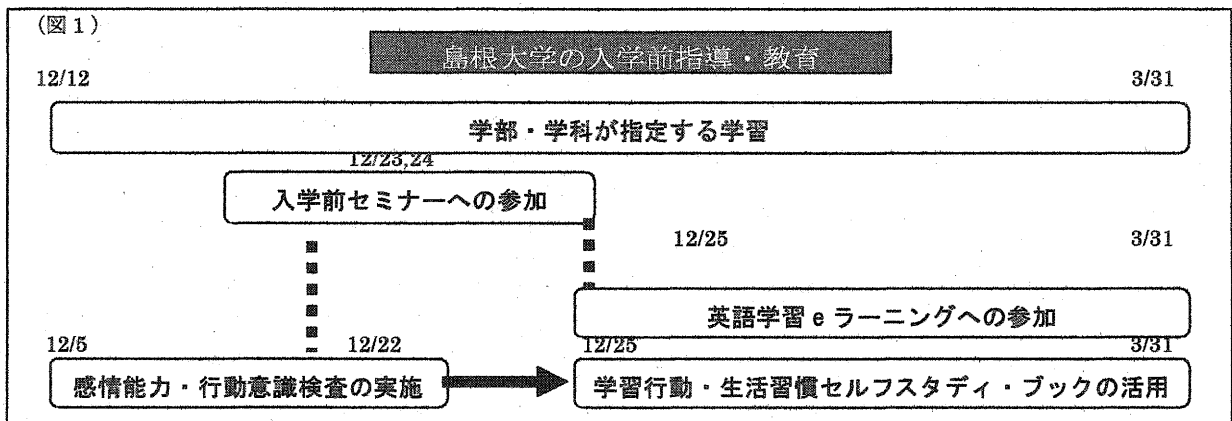
大学入学前に大学教育を受けるための準備教育の必要性が高まっているなかで、入学前指導・教育を大学教育に向けた教育システムとして在り方や方法を構築する時期にきている。

そこで大学準備教育としての入学前指導・教育は、①初年次教育をはじめとする大学教育への接続を図るものであり、②認知的な力に着目すれば高等教育へ転移可能な能力を育成することを目指し、③学習ストラテジーや学習スキルといった学び方や、学習志向性や態度の育成を図るものとして、④情意的な側面からとらえると高校教育からの転換を図る教育活動と位置付ける必要がある。

2 情意的な側面に着目した入学前指導・教育の構想

2.1 入学前指導・教育の経緯と構造

島根大学では推薦入試合格者への入学前指



導・教育を(図1)のように構築している。

平成20年度までは学部・学科によって実施しており、内容は指定読書及び読書レポート、課題学習、通信添削等、主として学部・学科の教育に適応するための専門分野領域への導入と高校教科学習定着を図るものであった。

平成20年度から宿泊形式のセミナーを実施した。従来学部学科によって実施のばらつきがある一方、基礎的な学力や進学目的意識の充実・高揚の必要性があり、入試センター所管事業として推薦入試合格者全員対象の入学前指導・教育を実施することとなった。

英語の基礎学力充実には当初から取り組み、入学後のTOEICを活用した英語学習の説明や、本学が独自に開発したe-learning、通信添削指導などを行ってきたが、平成23年度からは効率性、応答性、利便性の点から業者と外国語教育センターが共同実施することとした。

『大学入試研究ジャーナル』誌上では入学前指導・教育には①大学教育への適応を図るもの、②進学目的等大学生としてのキャリア意識の深化を図るもの、③大学生活への適応を図るものがあり、さらに大学教育への適応を図るものに④専門分野・領域への導入と高校の教科学習の定着を図るものがあることが報告されている。島根大学の入学前指導・教育を分類すると以下の表ようになる。

本稿では、入試センターが実施する入学前指導・教育について論じる。

【表1 入学前指導・教育の分類】

	① 教育・ 専門	① 教育・ 高校	② キャリア	③ 生活 適応
学部・学科	○	○		
外国語教育センター	○	○		
入試センター			○	○

2.2 情意的な力を伸ばす入学前指導・教育の課題

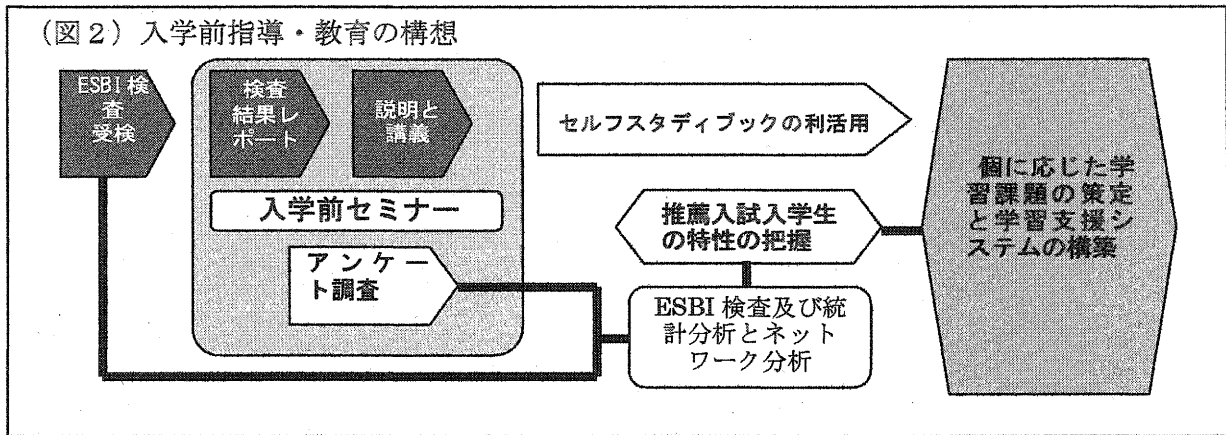
自分の成長への意欲や進学目的意識、学習規律や習慣、学習方法や学習技術といった情意的な側面は、進学後の学修を保障するものであり、高校・大学間の重要な教育課題として認識されている。しかし、入試後、入学までの期間でこうした情意的な力を伸ばすことには現実的な次の問題がある。①情意的な力の評価がむずかしい。②情意的な力は個人差が大きい。③レポートなどで読み取ろうとしても評価がむずかしく時間的な困難性がある。④これらの理由から高校との協力・連携が必要であるにもかかわらず教科学習よりも協力を得ることがむずかしい。

したがって、入学前指導・教育のなかで情意的な力を持続的に伸ばそうとするならば以下の課題を解決する必要がある。①情意的な力を定義する。②情意的な力をとらえる方法を開発する。③情意的な力を伸ばす学習課題や学習活動、指導・援助の方法や評価方法を開発する。④これらを踏まえ高校との連携・協力のシステムを構築する。

2.3 入学前指導・教育のねらい

そこで今年度は、他者の思いや考えを受け止める力やコミュニケーションする力、またストレスに対する適応力といった情意的な側面に着目し、情意的な力を測る方法として「感情能力検査・行動意識検査」(「Emotional & Social Behavior Index 検査」以下ESBI検査と略す)を導入して入学前指導・教育の改善を図った。

入学前指導・教育を大学入学までの期間に持続的に実施するためには、添削指導やe-learningを活用した指導が実践されてきている(森川2010など)。しかし、これらの方法で情意的な側面への働きかけはむずかしく、宿泊を伴う研修を実施しても成果を持



統的に伸ばすことがむずかしい。

入学前指導・教育を受ける高校生に進学目的意識や学習意欲、学習に対する適性や耐性など自己理解を深化させ、他者との人間関係を円滑に構築する力を育成することができる学習システムの構築に向けて、その基礎的な作業に着手することとした(図2)。

2.4 ESBI 検査について

導入したESBI検査(図3)とは米国で研究されているEI (Emotional Intelligence, 感情知能指数) の考え方により人間の感情能力と行動意識を計測する検査であり、感情能力検査により「ポテンシャル」を、行動意識検査により「行動の発揮度合い(意識の強さ)」を測定するものである。感情能力と行動意識の2つの検査の結果を掛け合わせることで、自身をより深く理解でき、能力開発の方向を明確にすることをめざし、能力開発と

してEIセルフスタディブックを活用した検査後の学習や生活の改善も視野に入れて導入した。(このESBI検査を活用した入学前指導・教育システムは本センターと(株)ファカルタス及び(株)ライトワークスとの共同開発中のものである。)

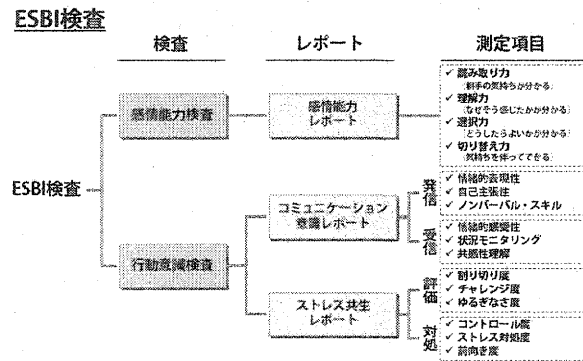
ESBI検査を導入したのは以下の理由による。①Webで受検が可能であり、限られた期間で検査結果を還元できる。②宿泊形式の研修の中で説明され自己理解を深めることができる。③宿泊形式のセミナーの中での振り返りによって行動特性の理解深化を図ることが可能であり、入学までの期間の生活の指針となる。④入学前段階の推薦入試合格者の上位面での特性をデータ化して利活用できる。

2.5 ESBI 検査の結果

ESBI検査の結果は、一人ひとりに「結果レポート」の形で通知される。ここでは全体の結果について、特徴をまとめる。

ESBI検査では、【感情能力】と【行動意識】との相関関係から受検者のポートフォリオを作成する。①感情能力を4つの指標(読み取り力、理解力、選択力、切り替え力)から構成し、この指標を数値化するとともに数値バランスから16のタイプに分類して特徴的な行動傾向を類型化する。②コミュニケーション意識とストレス共生意識の2側面を数値化するとともにから行動意識の特性を抽出する。

(図3)ESBI検査



③数値化されたデータを高・中・低の3段階に分け感情能力と行動意識の相関関係を分析する。今年度の受検者165名の3要素の分布状況と感情能力を従属変数としてコミュニケーション意識及びストレス共生意識との相関の分布は(表2)(表3)(表4)のとおりである。数字は実数、()内は受検者全体に占める割合である。

(表2) 3要素の段階別分布

	低	中	高
感情	28(17.0)	88(53.3)	49(29.7)
コミュニケーション	56(33.3)	49(29.2)	60(35.7)
ストレス共生	21(12.5)	32(19.0)	112(66.7)

(表3) コミュニケーション意識と感情能力

コミュニケーション意識	高	3(1.8)	33(20.0)	24(14.5)
	中	9(5.5)	28(17.0)	12(7.3)
	低	16(10.0)	27(16.4)	13(7.9)
		低	中	高
感情能力→				

(表4) ストレス共生意識と感情能力

ストレス共生意識	高	16(10.0)	60(36.4)	36(21.8)
	中	3(1.8)	18(10.9)	11(6.7)
	低	9(5.5)	10(6.0)	2(1.2)
		低	中	高
感情能力→				

ストレス共生意識がコミュニケーション意識より高い傾向がみられる。また、感情能力はコミュニケーション能力よりもストレス共生意識との相関が高いことがうかがえる。これらのことから、推薦入試合格者は起きた事象を前向きにとらえストレスをため込まない傾向がある一方、相手や状況に左右されないで知識、技術、経験を発揮する力の高低にかかわらず、感情豊かに相手に伝わるように自分の意見を言うことが苦手とする傾向もみられた。

2.6 「入学前セミナー」

情意的な力を育成することに対する入学前

指導・教育として宿泊を伴う研修は大きな役割を果たす。島根大学では「入学前セミナー」と称して平成20年度から実施してきた。平成23年度に実施した入学前セミナーの内容は以下のとおりである。

2.6.1 入学前セミナー実施概要

期日：2011年12月23日～24日(1泊2日)

入学手続き後、高校の教育課程に影響の出ない日程を設定している。

会場：島根県立青少年の家「サン・レイク」

対象：AO入試及び推薦入試I合格者168名のうち参加申込みをした高校生159名(参加率94.6%)毎年95%近い参加率である。

ねらい：入学までの期間に、学部・学科の教育・研究に主体的にかかわろうとする意欲や態度を高め、入学後の学生生活の学習目的や課題意識を明確にもつ。

参加教職員：入試センターをはじめ12名

インストラクター学生：34名

2.6.2 入学前セミナーの内容

【第1日目】

①開会集会 あいさつ、オリエンテーションの後、2日間を通しての基調講話・課題提示を行う。基調講話・課題提示は入学前セミナーで大学での学習スキルを身に付けることをねらいとしていることを講話する(今年度の主題名は「第4のアイテム『考える大学生』」とした。)

②セミナー 学生インストラクターとともに2日間にわたってグループディスカッションとプレゼンテーションを行う。1グループを6人で編成し(28グループ)、各グループに学生インストラクターがつく。2日間で4時間40分のセミナーとなる。

③入学前指導・教育について 個々に配付した「ESBI検査結果レポート」の結果概要及びの読み方と、「E Iセルフスタディ

ブック」を活用した入学までの生活について講義する。また e-learning を活用した英語入学前指導について説明する。

- ④分散会 学部に分かれて学生インストラクターと交流。クイズなどのレクリエーションも実施。

【第2日目】

第1日目に引き続きセミナーでのディスカッションの後閉会集会

⑤閉会集会 本学の就業力GPの紹介も兼ねて大学生としてのキャリアを考える講話。その後グループディスカッションのプレゼンテーション・講評を行う。

2.6.3 入学前セミナーのアンケート結果

参加者には閉会集会時にアンケートを行い、154名(回収率96.9%)から回答を得た。質問項目には「今までやってきたこと、これからやろうと思うこと」を13の項目(性格や志向を考える、つきたい職業を考える、生き方(将来の自分像)を考える、夢をもつ、生活のリズムやスタイルを変える、学校の役に立つことをする、好きと思える科目・教科を作る、打ち込んでみたいことを作る、学校の勉強に取り組む、いろいろな人と話し合う、趣味に没頭する、資格や免許を取る、大学の専門につながる勉強をする)について5段階(おおいに積極的にやる(やってきた)、まあまあ積極的にやる(やってきた)、少し積極的にやる(やってきた)、あまり積極的にやらない(やってこなかった)、まったく積極的にやらない(やってこなかった))で問い、入学前セミナーによる意識変容をとらえようとした。

「今まで」の平均値は3.5、「これから」の平均値は4.4であり、「今まで」と「これから」をクロス集計した結果、1872の回答総数のうち「これから」の値が下降したのは17であり、99.1%がプラスの意識変容をしていることがとらえられた。

2.6.4 ESBI 検査結果とアンケート調査結果

アンケートでは入学前セミナー期間中に最もよく話をした相手と2番目に話をした相手を尋ねた。大多数の者が初めて出会う生徒同士、初めて経験する環境のなかで、どのようなコミュニケーション行動をとるかをとらえ、また初めて導入した ESBI 検査の妥当性を検証することを意図した。

無記名や学生インストラクターの名前を記述した回答、「同じグループの人たち」など個人が特定できない回答を除き、有効な回答総数は233であった。その結果いずれにも出ない者が32人(下の表のC)、1人からしか名前が出てこない者が63人(同B)あった。複数の者から名前が挙がったのは58人(同A)であった(表5)。

(表5) よく話した相手の相関関係

		選ばれる側				
		A	B	C	空	他
選ぶ側	A (58) 116	86	6		13	11
	B (63) 126	64	33		17	12
	C (32) 64	35	9		15	5

* Aは複数から選ばれた者、Bは1人から選ばれた者、Cはだれからも選ばれなかった者、空は記名なし、他は学生インストラクターや個人が特定できない者。縦のA、B、Cの欄の数字は1人が2人を回答するため人数を倍にした形式的な回答数。()内は実数。

よく話した相手の相関関係をみると、①複数から選ばれた者は複数から選ばれたものを選ぶ傾向が強い。②一人から選ばれた者は半数は複数から選ばれた者を選ぶが一人から選ばれたものを選ぶ傾向もある。③だれからも選ばれなかった者は半数は複数から選ばれた者を選ぶが自分も選んでいないケースが多い。このことから推薦入試合格者の中でもコミュニケーション行動の頻度が高い者と低い者との分化傾向があると考えられる。

さらにコミュニケーション行動の頻度が高い58人のESBI検査結果を分析した(表5)。

(表5) 感情能力及び意識レベルの分布

	低	中	高
感情	3(5.2)	34(58.6)	21(36.2)
コミュニケーション	14(24.1)	21(36.2)	23(39.7)
ストレス共生	4(6.9)	18(31.0)	36(62.1)

(表2)の全体との分布を比較すると、感情能力及びコミュニケーション意識の面で高いレベルにある者が多いことが分かった。

3 考察

推薦入試合格者に対する宿泊形式の研修をもとに、情意的な側面で高校教育から大学教育への転換を図る入学前指導・教育の在り方や方法を開発する基礎的な研究を行った。

- ① 推薦入試合格者の情意的な側面の測定方法としてESBI検査を導入したことによって、特性の類型化が可能となった。
- ② 宿泊形式の研修が意識変容に有効であることが確かめられたが、ESBI検査結果とネットワーク分析結果から、コミュニケーション行動の分化傾向が示された。
- ③ さらに、コミュニケーション行動の高いレベルにある推薦入試合格者は、感情能力の高い者であることが示された。
- ④ これらのことから、ESBI検査と宿泊形式のセミナーにおける行動分析を組み合わせることで入学前段階における推薦入試合格者の一人ひとりの情意的な特性をデータ化して把握することの可能性が示唆された。
- ⑤ また、推薦入試合格者の情意的な特性をいくつかのタイプによってとらえることが可能となることで、合格者が自分の特性に応じて大学入学までの期間中の学習や生活面での指針をもたせる可能性が示唆され、入学までの期間中の高校と連携した指導の在り方を構築するための知見が得られた。

4 今後の課題

- ① 入学前段階の推薦入試合格者の質的な特性を把握する可能性を見出すことができたが、得られたデータを入試に関連するデータと結合したり、入学後の学修状況にかかわるデータとの連動を視野に入れて整理し、教学IRへの連携を展望する必要がある。
- ② 宿泊形式のセミナー後、入学までの期間中における学習や生活についての高校の指導を支援する仕組みを構築する必要がある。

参考文献

- 荒井克弘 2004「国立大学の入学者選抜」『IDE—現代の高等教育』,No.457,pp10-15
- 中條安芸子 2011「高校と大学の教育的接続—7年間で考える協働的接続プログラムのありかた—」『大学教育学会誌』,第33巻第2号,pp144-149
- 小林勝法 2005「入学前教育の実際とその効果」『大学教育学会誌』,第27巻第2号,pp73-74
- 羽田貴史 2008「おわりに—総括と展望—初年次教育と大学における「学びの転換」『大学における「学びの転換」とは何か』東北大学高等教育開発推進センター編,pp137-145
- 松下佳代 2010「大学における「学びの転換」とは—unlearn 概念による検討—」『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』東北大学高等教育開発推進センター編,pp5-15
- 森川・三宅・小山・清水 2010「学力試験を課さない入試区分合格者への e-Learning を用いた入学前教育の実践」『大学入試研究ジャーナル』,No.21,pp231-236